

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
アニュアルレポート 2008

社団法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 〒101-0047 東京都千代田区内神田2-8-4 山田ビル4F www.savechildren.or.jp

この冊子は、株式会社ラビトのご協力により印刷・製作しています



世界の子どもたちに、たくさんの変化が訪れました。

皆さまのあたたかいご支援により、
2008年も子どもたちのために支援活動を行うことができました。
このアニュアルレポートは、私たちの活動の成果です。
子どもたちとその周りの大人たちの気持ちや暮らしがどのように変化したか。
各国担当者のレポートをとおして、その一部をご紹介します。

社団法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン (SCJ)

1986年設立。世界と日本で子ども支援を行っています。1995年に社団法人の認可を受け、2001年に特定公益増進法人として外務省より認定。ネパール、ベトナム、ミャンマー、モンゴルの事業地では日本人スタッフを駐在させ、教育、栄養・保健、子どもの保護などの分野で支援事業を展開。ヨルダン、スリランカ、ミャンマー、中国などの事業地でも日本人スタッフを駐在させ、紛争または地震・津波などの緊急事業を行っています。また、エチオピア、カンボジア、コートジボワールの事業地では他国のセーブ・ザ・チルドレンと協働し活動をしています。

セーブ・ザ・チルドレン (SC)

1919年創設。90年にわたり、すべての子どもの、生きる、育つ、守られる、参加する「子どもの権利」の実現を目指し、さまざまな支援活動を展開。1989年に国連総会で採択された「子どもの権利条約」の作成にも携わりました。子ども支援の世界的リーダーとして、国連や各国政府からも重要性を認められ、国連経済社会理事会 (UN ECOSOC) のNGO最高資格である総合諮問資格 (General Consultative Status) を取得。日本を含め、世界27カ国にある独立したセーブ・ザ・チルドレンがパートナーシップを結び、他のNGO団体と連動し、現在、約120の国・地域で活動中です。

ネパール

「子どもの気持ち、考えてなかったな」

ある農村の子ども会に参加した教師

多くの子どもが学校に通えるようになってきた。じゃあ次は、「質の高い教育」だ。教育の関係者たちは、教授法から教室の壁のデザインのことまで、新しいことに取り組もうと、必死に議論している。教師の彼はどこか違和感を覚えていた。一方、ある日の子ども会で出会った中学生の意見は、とてもシンプルだった。「質の高い教育とは？」との問いに、「子どもが毎日学校に通う。先生が授業に遅れない。親は宿題が終わってから家の手伝いをたのむ。」実は、当たり前のことができていない。男の子の素直な言葉が、彼に大切なことを気づかせてくれた。

定松栄一の報告



大事にしたいのは、子どもたちの目線です。

ネパールでは、「すべての子どもを学校へ」を合言葉に、未就学の子どもを学校に通わせるための活動を実施。それが一定の成果をあげた2008年からは「教育の質の向上」にも力を入れることになりました。教育支援の世界でも、新しい教育理論、新課程の教科書や新しいデザインの教室など、最新の研究成果から生まれた改善手法が頻繁に議論されています。しかし、これらの手法を使っていくら先生が熱心に教えたとしても、生徒が理解し活用できない教育は質が高いとはいえません。「難しいことの前に、やるべきことがあるんじゃない？」子どもたちと接していると、そう語っているようではありません。子どもたちの目線とらえた現実からスタートすること。それが私たちの活動の原点ではないか、と思っています。

ネパールの主な活動と成果(2008年)

- ・子ども、青年、女性、先住民のグループ125組が協力、就学キャンペーンなどを実施。→ 1,856人の子どもが学校に通えるようになった。
- ・学校が遠くて通えない子どものために分校を建設。また、学校に通ったことがなく、ある程度の年齢を過ぎた子どもに識字教室を開設。→ 180人の子どもが分校へ、100人が公立学校への編入準備コースで勉強することができた。

ベトナム

「うそっ！成長してる！うれしい！」

栄養研修に参加した稲作農家の母親

ある日、生後10ヶ月の女の子が栄養不良と診断された。
母親は、幼い娘にご飯しか与えていなかった。
それが当たり前だと思っていたし、周りの親たちも同じだった。
そんな彼女も研修に参加し、自分で育てた野菜を、娘の離乳食に使いはじめた。
体重測定の日、娘の栄養状態が「良好」と診断された。
嬉しさでいっぱいになった。それからは、
栄養のある食事をつくってあげることが彼女の生きがいになった。

高谷直美の報告



少しだけ、親の意識を変えること。それがはじまりです。

農村部の子どもたちの栄養不良は、ベトナムの深刻な課題です。私が駐在するベトナムの農村には、育児書も育児教室もありません。また、一般家庭にはインターネットもなく、母親たちが子育てのための栄養知識を得る手立ては限られています。多くの母親は、自分たちがかつてそうだったように、子どもは勝手に成長していくのだと考えています。私たちは栄養研修や家庭菜園研修を行い、栄養バランスのとれた食事や、野菜作りのノウハウを伝えました。研修に参加したある母親の言葉です。「子どもには、健康に育ち、学校教育を受け、幸せな人生を歩んで欲しい」子どもの健やか成長のためには、親が意識を変えて行動することが何より大切なのだと思います。

ベトナムの主な活動と成果(2008年)

- ・乳幼児の発達のために、体重測定、保健スタッフや栄養不良児の保護者への研修に加え、新たに母乳での育児を奨励する活動を実施。
→ 栄養不良率が9か月で28.1%から18.7%に下がった。
- ・小規模の貸付事業を引き続き展開。→ 新たに887人の貧困層の女性が、借りた原資で家畜や野菜の苗を購入し育て、それを市場で売って、貯蓄や栄養のある食材の購入などにまわしている。

ミャンマー

(子どもの健康と栄養事業)

「今日は野菜とお肉ね、お母さん」

栄養給食を食べた男の子

その村には、食べものに関するさまざまな迷信があった。
子どもは野菜や豆を消化できない。豚肉を食べると咳がでる。
SCJの栄養給食が、村の常識を変えた。
「野菜とかお肉とか、こんなにおいしかったんだ！」
興奮気味に話してくれたのは、給食を食べた男の子。
給食と同じ料理が食べたいと、子どもが母親にせがむ。
そんな親子のやりとりが、村で見られるようになった。

(「SCJ」は、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの略です。)

和田美穂の報告



ともに活動することが大切。一方的では何も残せません。

子どもたちの健康のために、SCJは何ができるのか？ 現場で日々自問自答しながら活動を行っています。ひとつ分かったことは、村人の間違った知識や行動を正す、という態度では決して成功しないということ。この村でも、健全な発育を損なう迷信が根強く残っていましたが、まずは世間話からはじめて、友人として信頼してもらうことを心がけました。初めはスタッフのみで実施していた栄養給食、保健・栄養教育も、こうした密なコミュニケーションにより、次第にその価値を認めてくれるようになり、最終的には親たちが自発的に取り組むようになりました。保護者自らが考え、行動するようになれば、きっと事業の効果は継続するはずですよ。

ミャンマーの主な活動と成果(2008年)

- ・栄養不良児の多い地域で、栄養教育と栄養給食、食材の供与を実施。→ 参加した3歳未満の子どものうち、4分の1にあたる子どもの栄養状態が良好となった。
- ・同地域で、村人主体で保健所を3か所建設。→ 簡単な病気やケガの診察、妊産婦検診や出産、予防接種などの医療サービスを提供できるようになった。

モンゴル

「ねえねえ、お友だちができたの」

障がい児のためのリハビリセンターに通う女の子

その子は目の病をわずらい、ほかの子と比べて学びも遅かった。
リハビリセンターに通いはじめた頃は、
ほとんど誰とも口をきかず、表情は固かった。
でもスタッフや同年代の子どもたちと接するなかで、
少しずつ、彼女の顔に笑顔が現れるようになった。
そして、センターではじめて友だちができた。
女の子は少し照れながら、できたばかりの友人の話聞かせてくれた。

上田雅子の報告



親の意識を変えて、少しずつ状況を改善していきたい。

モンゴルにおいて、障がいを抱える子どもは、家庭内暴力・ネグレクト（育児放棄）を受けるリスクが高いといわれています。また、障がいに対する国の支援が不十分なため、障がい児の両親の多くは共働き。子どもたちは家に閉じ込められ、社会から隔離された生活を送っています。SCJはリハビリセンターを拠点に、障がい児のケアをはじめ、保護者の意識・態度の変化を促す活動を行っています。自分たちだけで不安や悩みを抱え込んでいた保護者たちも、会合や子育て研修で同じ境遇の人々と接し、わが子の障がいと真剣に向き合うようになりました。人々の意識を変えることは目立たず時間のかかる活動ですが、これからもじっくりと取り組んでいきます。

モンゴルの主な活動と成果(2008年)

- ・社会・経済的に厳しい状況にある子どもたちの生活支援、生活指導の実施。→ ストリートチルドレン150名が支援を受け、18名が家族の元で再び暮らし始めた。
- ・障がいを持つ子どもに対し、身体の運動機能を高めるリハビリサービスを実施。→ その後、公立学校に通えるよう、統合教育に力を入れている。

アフガニスタン

「私のやり方は、間違っていたのだろうか・・・」

校内暴力・体罰防止の研修に参加した男性教師

研修に参加したことで、男性教師は深く悩んだ。

これまでの彼は、教え子を強く叱り、叩くこともあった。

子どもたちには言葉では通じないこともある。そう、信じていた。

でも研修で、幼い頃に受けた暴力が心に一生の傷痕を残すことを知った。

暴力は許されない。では、どうやって生徒を指導すればよいのか？

答えはまだ出ていない。でも、決意した。自分がこの問題に立ち向かう。

彼のような地元の教師たちが、アフガニスタンの教育復興の礎になっていく。

園田智也の報告



地元の教師たちとともに、考え続けています。

教育は子どもたちに自尊感情や他者を思いやる気持ちを育みます。長い内戦を経験したアフガニスタンの復興のために必要なことです。2008年、パルミヤン州サイガン郡で約1ヶ月間にわたる教員研修を行いました。内容は、分かりやすい授業の進め方、そして、体罰に頼らない生徒指導法です。地元の教師たちが、子どもへの暴力や保護について学ぶのは初めての経験。戸惑いの声も多く聞こえました。たしかに体罰としつけの線引きは、難しい問題。でも、研修に参加した教師たちは、暴力や体罰と真剣に向き合いはじめています。紛争の影響下にある子どもたちにとって本当に必要な教育とは何か？ 彼らとともに、答えを探していきます。

アフガニスタンの主な活動と成果(2008年)

- ・学校教員95人に対し、各科目の理解度と体罰にたよらない指導法の知識を深めるための研修を実施。→ 研修後の試験の平均点が研修前の33点から77点へ、飛躍的に伸びた。
- ・11月より、パルミヤン州の学校生徒および不就学の子ども約3,750人を中心に、保健・衛生・栄養の教育事業を実施。→ 子どもたちの感染症や栄養不良の予防を目指している。

ミャンマー

(サイクロン被害に対する緊急支援)

「学校に行くと、 イヤなことを忘れられるんだ」

修復作業を行った小学校に通う男の子

大型サイクロン「ナルギス」は、
その男の子から、親と兄弟の命を奪った。
当時の恐怖と悲しみが、今も彼を苦しめている。
唯一心が安らぐのは、学校で過ごす時間。
「学校は好きだよ。友だちと会えるから」
そう語る男の子の周りには、同じような境遇の子どもたち。
ここでは学校が、子どもたちの心のよりどころになっている。

大須賀智子の報告



被災から立ち直るために、子どもたちには学校が必要です。

ミャンマーを襲った大型サイクロン「ナルギス」は、4,000棟以上の学校に被害を及ぼしました。SCJでは、被災直後から食糧や生活用品、衣類などを配給するとともに、校舎の修復や仮設学校の設置に力を注いできました。さらに、8月から、サイクロンの影響で仕事ができなくなった地元の漁師たちへ生計支援を行っています。保護者の収入が安定すれば、子どもたちは食べものや衣料を得ることができ、学校へ通える道も開けます。心に深い傷を負った子どもたちにとって、以前のように学校に通い、授業を受け、友だちと遊ぶことが、被災以前の日常を取り戻すきっかけとなります。1日も早く、子どもたちがいきいきと過ごせるように、今後も保護者や地域住民と協力しながら支援を続けていきます。

ミャンマーの主な活動と成果(2008年)

- ・災害後1か月間で30,000を超える被災家庭に食糧、生活必需品、衣類を配布。→ 被災者153,790人を支援した。
- ・サイクロン直後、医療サービスと仮設クリニックの設営を実施。→ 9,675人の医療アクセスを改善した。
- ・152校の学校建設および校舎の修復。学用品の配布を実施。→ 32,500人の子どもたちが学習機会を手にした。

ヨルダン

「いってきまーす！」

ヨルダンの幼稚園に通うイラク難民の男の子

イラク難民の母と子は、それぞれに不安を抱えていた。
子どもは、初めての幼稚園に対する、不安。
母親は、息子を異国の幼稚園に通わせることへの、不安。
でも、男の子が幼稚園へ通いだすと、ふたりの不安は喜びに変わった。
男の子は幼稚園で、たくさんの友だちができた。
子ども同士の関係に、イラク人とヨルダン人の隔たりはない。
毎朝元気に幼稚園へ向かう息子を、母親は誇らしく感じている。

高松郷子の報告



子どもへの想いは、イラク人もヨルダン人も変わりません。

ヨルダンには数十万人のイラク難民が暮らしています。難民の子どもは無料で公立学校に通えますが、数の少ない幼児教育施設では、すべての子どもを受け入れきれていないのが現状です。SCJは2007年より、イラク人を含む幼児の受け入れ先拡大を支援してきました。しかし、教室の数が増えても、すべての園児たちが差別なく質の高い教育を受けられなければ意味がありません。そのため、幼稚園教員への教育研修をはじめ、イラク人とヨルダン人がお互いを理解し合うためのコミュニティーイベントや交流会も積極的に行っています。活動を通じて、イラク人もヨルダン人も出身国に関わらず、子どもへの質の高い教育を望んでいることを知ることができました。

ヨルダンの主な活動と成果(2008年)

・10か所の幼稚園の修復と入園の斡旋キャンペーンなどを実施。→ 2,179人の子どもたちが環境の整った幼稚園に通えるようになった。
・教員や幼稚園運営者、ボランティアや親たちに対し、ストレスやトラウマを抱える子どもの心理社会的なケアや遊びの重要性について学ぶワークショップなどを実施 → 6,621人が子どもに対する理解を深めた。

スリランカ

「守ってみせる、私たちが」

ECD(早期幼児教育)センターの研修に通うトリンコマレ市民

感染症、地雷、誘拐、性的虐待・・・

内戦が続くスリランカの子どもたちは、さまざまな脅威にさらされている。

いつまでたっても変わらない状況に、彼は無力感を抱いていた。

でもECDセンターの研修に通い、子どもの虐待や保護について学ぶうち、

これまでにない意識が芽生えはじめた。

地域の子どもたちを守るのは、警察でも政府でもなく、自分たちの役目。

安全なセンターで無邪気に遊ぶ子どもたちを見て、彼はさらに決意を固めた。

山本俊輔の報告



子どものための活動は、大人のための活動でもありました。

2007年まで内戦の激戦地だったトリンコマレも地域復興が除々にはじまり、避難していた市民の多くが戻ってきています。しかし、内戦の傷痕が残る村々での生活は依然厳しく、栄養失調の子どもや避難生活のトラウマを抱える子どもも少なくありません。狂犬病や破傷風などの感染症が蔓延し、徴兵目的の誘拐や脅迫、性的虐待も報告されています。こうした状況のなか、SCJではECDセンターに焦点をあて、支援活動を行ってきました。食糧の配給、教育施設の修復とともに重要視したのは、大人たちの意識を変えること。内戦のストレスを受ける子どもたちには、「周りの大人たちに守られている」という安心感が必要です。子どもの保護や教育に無関心だった保護者や地域住民たちも、研修を通じて責任感が芽生えはじめています。

スリランカの主な活動と成果(2008年)

- ・内戦のストレスやトラウマを抱えた子どものための施設や安全な遊具の設置を実施。→ 962人の子どもが安全な遊び場で遊んでいる。
- ・乳幼児の栄養不良率が30%を超える地域で、栄養価の高い緑豆粥やビスケットを配布。→ 子どもの栄養状態が改善、免疫力が高まった。

日本

「思っていることを表現できた」

CtoP キャンペーンに参加した高校生

CtoP (Child to Public) キャンペーン：小学校高学年から高校生の子どもたちが、「私にできること」をテーマに自分たちのメッセージを映像で発信するウェブキャンペーン。

私にできることって何だろう？

CtoPキャンペーンに参加した子どもたちは、いっしょうけんめい考える。

仲間たちと協力するうち、自分のできることが少しずつみえてくる。

もっと自分に自信を持っていい、と気づいた高校生。

いじめをしない、と誓った小学生。

できることはたくさんある。伝える力も持っている。

まずは、それに気づくことが大切。

津田知子の報告



子どもの力を信じて、サポートすること。それが私たちの役割です。

いじめや虐待、不登校。途上国だけではなく日本にも、子どもたちを取り巻く課題はたくさんあります。しかし、子どもも大人も、このような課題を「子どもの権利の侵害」と捉えられていないように感じます。2008年は、子ども自身が、子どもの権利を軸に意見を表明し、他者と対話できる場をつくることを心がけて活動してきました。CtoPキャンペーンもそのひとつです。いじめや差別をしない、言葉や国を超えて想いを理解し合える、みんなで協力すれば社会を変えられる・・・子どもたちは、自分のできることについて、たくさんのメッセージを発信しました。子どもたちの声に耳を傾けながら、その“きっかけ”をつくり、サポートすることが私たちの役割なのだと思います。

日本の主な活動と成果(2008年)

- ・全国84か所、小中学生を中心に参加型学習プログラム“Speaking Out”を実施。→ のべ2250人の子どもたちが、世界の子どもの現状や子どもの権利を理解し、意見表明の重要性を認識した。
- ・6月に国際シンポジウム“Think! Child Rights 2008”を実施。また「ポジティブ・ディシプリン(SCの子育て法)」のセミナーを各所で実施。→ のべ400人の参加者が、子どもの権利の視点にたった、子どもに対するより良い接し方への理解を深めた。

カンボジア

「頑張らなくちゃ、私も」

分校に通う男の子の母親

息子が村にできた分校へ通うようになって、
彼女にひとつの目標ができた。
それは、息子に高等教育まで受けさせること。
そのためには、たくさんのお金が必要になる。
生活は厳しい。でも、毎日働きながら学校に通い、
宿題にも熱心に取り組む息子の姿を見ると、励みになる。
彼女は小さな店を立ち上げ、少しずつ貯金をはじめている。

カンボジアの主な活動と成果(2008年)

- ・200の村で幼児教育を導入、障がいを持つ1,000人以上の子どもへの職業訓練、学校建設や教員研修などの教育支援を実施。→ 全体で500,000人以上の子どもを支援した。
- ・特に貧しい家庭を対象に、家庭菜園や家畜の飼育、小規模の貸付を実施。→ 働きながら学校に通う子どもの負担を減らした。

エチオピア

「これで、学校に行かせられる」

セーフティネット・プロジェクトにより生計支援を受ける父親

毎年のように起こる干ばつが、農業を営む彼を悩ませた。
干ばつになると、家族を食べさせることも、
子どもを学校へ通わせることも、ままならなくなる。
彼は農業のかたわら、道路づくりの仕事をはじめた。
野菜を売る以外に、収入を得るのは初めての経験。
でも、お金のほかにも得たものがある。
彼は農業以外の仕事を知ること、家族を養っていく自信を手に入れた。

エチオピアの主な活動と成果(2008年)

- ・生活に困っている人が道路の建設や環境保全などの公共事業に参加するプログラムを実施。→ およそ44,800人が食糧と現金を得て、生活改善とともに、地域の環境改善に貢献した。
- ・家畜の飼育研修、野菜の種の貸し出しなどを実施。→ 食糧ならびに収入源を確保し、子どもたちの生活が改善された。

コートジボワール

グアテマラ

「学校が、だんだん好きになってきた」

修繕された学校に通う男の子

男の子の通う学校は、
支援により、水道と電気が使えるようになった。
天井が修理されて、雨漏りの心配もなくなった。
変わったのは、校舎だけではない。
先生が授業に遅れなくなり、体罰をふるうこともなくなった。
男の子にとって、それが何より嬉しい。
学校生活が改善されるにつれ、彼は学校をどんどん好きになっている。

コートジボワールの主な活動と成果(2008年)

・子どもの保護や体罰の禁止に関する教員研修を実施。→ 教員576人が参加、体罰を行わないなどの指導法を習得した。
・86の小学校建設・修繕活動を実施。→ 以前よりも安全・適切な環境で子どもたちが学べるようになった。

「将来の夢ができたんだ」

マーケットの中の学校に通う男の子

男の子は1日の大半を、マーケットで過ごしている。
午前中は母親が営む露店で野菜を売り、その後、学校へ。
でも、マーケットの中に学校ができるまで、
仕事が忙しい男の子は、学校教育を受けたことがなかった。
学校に通いはじめたことで男の子には夢ができた。それは、学校の先生。
「僕のように、マーケットで働く子どもたちを教えたいんだ」
男の子は、目を輝かせながら語ってくれた。

グアテマラの主な活動と成果(2008年)

・働く子ども、元子ども兵士、障がいを持った子どもたちが、学校教育を受けられるよう、教育環境の整備とともに、政府への働きかけを実施。→ 全国で50,000人以上の子どもたちを支援した。

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 2008年度 主な事業一覧

国	プロジェクト名	具体的な活動	総受益者数(人)	備考
海外事業部				
ネパール	コミュニティへの働きかけを通じた公立小学校教育の質の改善事業	学校運営委員会の能力強化、教員研修、子ども委員会などを通じた就学キャンペーン、編入準備のための識字教室、幼児開発教育など	12,025	左記は延べ人数(子ども、大人含む) JICA助成
	武力紛争の影響下にある子どものための教育事業	武力紛争に影響を受けた子どもたちのための就学支援(学校運営委員会の能力強化、子ども委員会などを通じた就学キャンペーン、編入準備のための識字教室、幼児開発教育など)	7,522	左記は延べ人数(子ども、大人含む) 外務省助成
ベトナム	総合的子どもの発達事業	栄養改善活動、産前検診、家庭菜園の普及、未就学児の教育改善活動	2,000	左記は子どものみ(妊婦や研修参加者数は含まず) 外務省助成
	小規模貸付事業	貧困家庭の女性などへの原資提供、政府職員を対象とした事業運営・監理研修	900	左記は参加女性のみ(子どもや政府職員の研修参加者数は含まず)
	子どもの参加による環境教育事業	子どものファシリテーター研修、教育セッションの実施	1,155	左記は参加生徒数(教育関係者や教員は含まず)
ミャンマー	バゴ西管区ジゴン・テゴンにおける鶏の雛の配布を通じた子どもの栄養改善事業	ワクチン済み鶏の配布による子どもの健康・栄養状態の改善	492	
	カレン州バアンにおける子どもの健康と栄養事業	子どもの定期的身体測定、栄養給食ワークショップ、両親や地域住民の、子どもの健康・栄養に関する行動変容研修、ハエ防止型トイレの設置、医療サービスの改善のための医療施設の修繕、母子健康手帳の利用研修	1,181	JICA助成
アフガニスタン	学校教員研修事業	学校教員に対する担当科目理解向上および校内体罰禁止を目指した研修	95	左記は研修参加者数のみ(子どもの数は含まず)
	保健・衛生・栄養教育事業	子どもの保健衛生問題の予防を目的とした衛生教育及び栄養教育の実施	4,175	
	初等教育のクオリティ改善事業	補習授業担当の教員たちの資質と教授法能力の強化、子ども委員会の設置による意見表明の推進	3,720	
モンゴル	体罰のない子育て教材開発普及事業	ポジティブ・ディシプリン教育法カリキュラム及びマニュアル作成、大学で教員・学生に研修、保護者に研修、ポジティブ・ディシプリン教育法の実施とモニタリング	950	左記は大学教員・学生、保護者などの直接受益者のみ
	低所得者居住区の子どもの「心の豊かさ」プロジェクト	子どもセンターを拠点としたカウンセリング、家庭訪問による育児指導・情報提供、フォトグラフィー活動、ラジオ番組制作活動、子ども議会の活動	130	左記は子どもの直接受益者
	地域レベルの子ども保護サービス充実事業	家庭訪問の実施とカウンセリング、保護者グループカウンセリング、保護者と再統合した子どもたちのフォローアップ活動、行政との連携	400	左記は子どもの直接受益者
	子ども保護サービス充実強化事業	子どもセンターにて生活支援・学習サポート・カウンセリング・保健衛生指導、障がい児リハビリセンターにてリハビリ支援・心理カウンセリング、障がい児の保護者対象の育児指導セミナー・情報提供	400 及び 75家族	左記は直接受益者
	ゲル集落の子どもの生活視点及び子どもの保護体制確立のための能力向上事業	ゲル集落の子どもたちに生活支援・ライフスキル教育、子ども保護に携わる人材に強化研修、子ども保護チームの組織と研修の実施、啓発活動、行動規範の出版・普及	①2,500 ②3,000 ③130	左記は①ゲルに暮らす子ども ②保護者及び地域住民 ③保健士などの関係者 難野国際ボランティア野金
子どもの権利実現のための暴力のない公平な教育環境推進事業	ベースライン調査の実施、事業実施の周知活動、改定教育法の周知活動	①13,500 ②1,000	左記は①対象校16校の生徒数 ②教員などの関係者 JICA助成	
エジプト	ストリート・チルドレン支援プロジェクト形成調査	ストリートチルドレン問題対処のための中長期的支援策を提案するための調査実施		JICA助成

国	プロジェクト名	具体的な活動	総受益者数(人)	備考
緊急事業部				
ミャンマー	ヤンゴン管区及びエヤワティ管区における緊急支援物資配布事業	食糧、生活用品、衣服の配布	153,790	ジャパン・プラットフォーム(以下JPF)助成 地球市民財団の協力
	ヤンゴン管区及びエヤワティ管区における緊急教育支援事業	学校校舎の修復・仮設教室設置、教材配布	32,500	JPF助成
	エヤワティ管区における緊急漁業復旧事業	漁業資材(カヌーボート、魚網、メンテナンス工具)の配布	14,000	JPF助成
ヨルダン	ミャンマー・サイクロン被災者支援	①エヤワティ管区における乾パン配布 ②ヤンゴン・エヤワティ管区における乾パン・クラッカー配布	①1,949世帯 ②7,569	日本外交協会、日本航空、 国連世界食糧計画、JPF協力
	イラク避難民人道支援：ザルカ・イルビッド・マフラクにおける就学前ヨルダン・イラク人幼児の緊急教育支援事業	幼児教育のための指導者育成、教室・施設の修復	5,880	JPF助成
スリランカ	イラク避難民人道支援：北東部・南西部における就学前イラク人・ヨルダン人幼児の緊急教育支援事業	施設整備、教育備品の設置、入園あっせん、親、教職員、ボランティアなどの研修、コミュニティ活動	4,151	JPF助成
	トリノコマレ県における帰還民への緊急教育支援事業	就学前教育施設の整備、教員の育成、教育活動用緊急キット供与、栄養補助食品の配布、就学前教育施設運営委員への研修	1,237	JPF助成
中国	中国・四川大地震被災者支援	四川省から雲南省に集団避難した子どもたちおよび子どもを取り巻く大人に対する心理社会的ケア研修	2,160	JPF助成
パキスタン	パロチスタン州ケチ地区におけるシェルター供与、毛布配布、医療支援事業	住居用シェルター、毛布配布。小児救急医療体制支援。	121,710	JPF助成
ネパール	水害被災者への包括的緊急支援事業	学校・幼稚園校舎修復、トイレ設置、備品・教材提供、食糧・栄養パッケージ配布、生活用品配布、健康診断	80,447	JPF助成
インドネシア	スマトラ島南西沖地震被災者への緊急支援：ベンクル州ムコムコ県における学校テントおよび教室備品供与事業	学校テント、学校備品配布	14,160	JPF助成
インド	インド水害被災者支援事業：ビハール州における緊急食料配布事業	乾パン配布	15,446	日本外交協会、日本郵船、JPF協力
子どもの権利推進部				
日本	日本の子どもに対する教育事業“Speaking Out”	学校等で国際協力や子どもの権利に関する参加型学習プログラム実施、教材開発、ボランティア育成など	①2,250 ②321	左記は延べ人数①参加した子ども1,940、大人310②ボランティア、地球市民財団との共同事業
	子どもに対する暴力禁止を目指す情報発信事業	国際シンポジウムの実施、子どもの力を伸ばす子育て法「ポジティブ・ディシプリン」による啓発活動	400	左記はセミナーとシンポジウムの延べ参加者数
	子どもの権利推進事業	チャイルド・ライツ・プログラミング研修およびガイドブック作成、チャイルド・ライツ・センター活動促進委員会の実施、子どもの権利に関する啓発	80	左記は延べ人数(職員、研修参加者)

※上記にくわえ、セーブ・ザ・チルドレン世界連盟の事業地である、カンボジア(SCノルウェー)、エチオピア(SCイギリス)、コートジボワール(SCスウェーデン)、グアテマラ(SCノルウェー)の事業を支援する。

2008年度収支計算書 (2008年1月1日～12月31日)

I. 事業活動収支の部

(単位:千円)

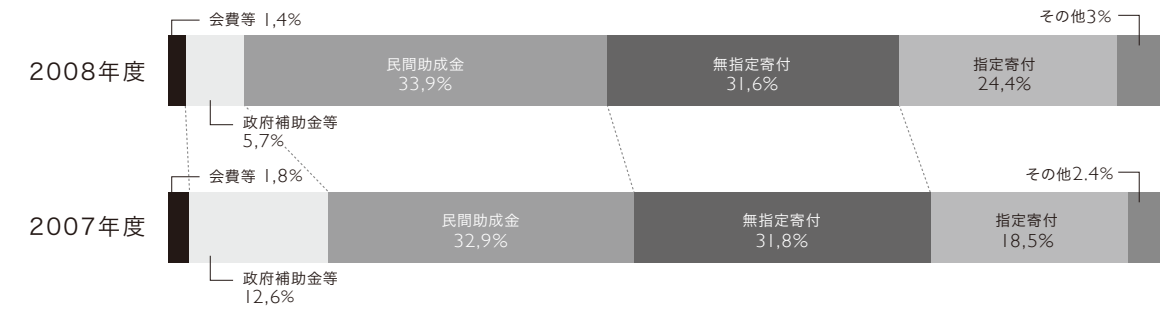
1. 事業活動収入

科目	2008年度	2007年度	差異
会費等	14,015	14,826	▲811
政府補助金等収入	58,626	103,143	▲44,517
民間助成金収入	347,891	269,273	78,618
寄付金収入	576,245	413,025	163,220
無指定寄付収入	325,150	261,745	63,405
指定寄付収入	251,095	151,280	99,815
海外事務所収入	25,118	18,512	6,606
業務受託収入	4,699	0	4,699
その他収入	815	673	142
事業活動収入計	1,027,409	819,452	207,957

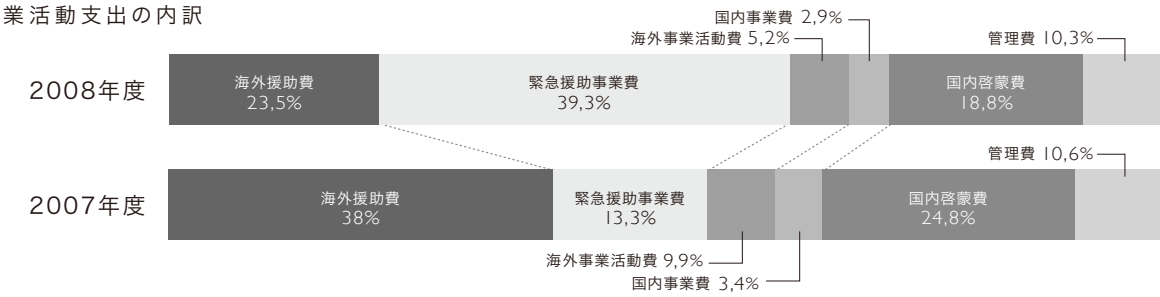
2. 事業活動支出

科目	2008年度	2007年度	差異
海外援助費	271,852	227,201	44,651
ネパール	72,430	45,132	27,298
ベトナム	42,159	63,364	▲21,205
ミャンマー	19,983	15,237	4,746
アフガニスタン	11,054	48,873	▲37,819
モンゴル	45,324	5,320	40,004
エチオピア	14,651	20,594	▲5,943
カンボジア	27,541	9,495	18,046
コートジボワール	7,378	8,154	▲776
その他の地域への海外援助	31,332	11,032	20,300
緊急援助事業費	454,193	79,340	374,853
イラク難民支援(ヨルダン)	112,572	4,527	108,045
スリランカ	26,870	0	26,870
ミャンマー	163,253	0	163,253
その他緊急支援	151,498	74,813	76,685
海外事業活動費	60,225	59,244	981
国内事業費	33,128	20,051	13,077
国内啓蒙費	216,666	148,103	68,563
管理費	118,363	63,822	54,541
事業活動支出計	1,154,427	597,761	556,666
事業活動収支差額	▲127,018	221,691	▲348,709

1. 事業活動収入の内訳



2. 事業活動支出の内訳



II. 投資活動収支の部

1. 投資活動収入

	2008年度	2007年度	差異
特定資産取崩収入	43,403	11,703	31,700
固定資産売却収入	0	90	▲90
保証金返還収入	3,729	0	3,729
投資活動収入計	47,132	11,793	35,339

2. 投資活動支出

特定資産取得支出	5,924	14,700	▲8,776
固定資産取得支出	5,633	2,489	3,144
保証金差入支出	15,279	0	15,279
投資活動支出計	26,836	17,189	9,647

投資活動収支差額

投資活動収支差額	20,296	▲5,369	25,692
当期収支差額	▲106,722	216,295	▲323,017
前期繰越収支差額	371,421	155,126	216,295
次期繰越収支差額	264,699	371,421	▲106,722

パートナーシップ

私たちの活動は、公的機関、助成団体、企業、個人など多くの方々の温かいご支援、ご協力により成り立っています。

<ブルガリ ジャパン株式会社>

2009年に創立125周年を迎える記念事業の一環として、セーブ・ザ・チルドレンが行うキャンペーン「Rewrite the Future～いっしょに描こう!子どもの未来～」へのサポートを2008年度より開始していただきました。セーブ・ザ・チルドレンへの貢献として、2009年末までに日本円にして約12億5千万円相当(2009年1月時点)の収益を上げる目標を掲げ、1.25億円相当の事前寄付に加えて、2009年より、内側にセーブ・ザ・チルドレンのロゴが刻み込まれたシルバー製のアニバーサリーリングおよびペンダントを販売、同商品の収益の一部の寄付を表明していただきました。また2009年末に開催されるハイジュエリーおよび高級時計のオークションによる収益全てもセーブ・ザ・チルドレンに寄付して下さることも決定しています。

<タリーズコーヒージャパン株式会社>

5年以上にわたり、コーヒー豆「バンビノブレンド」の売上の一部から、ご寄付をいただいております。さらに「タリーズピクチャーブックアワード」受賞作品の売上の一部もご寄付いただいております。2008年はポストカードコンテスト応募用紙の店舗での設置や、「ミャンマーサイクロン緊急支援報告会」の会場として本社会議室をご提供いただくなど、資金面だけでなく運営面でのご協力もいただきました。

<サンヨー食品株式会社>

継続的なご寄付に加え、人気ブランド「サッポロ一番」のパッケージ上にセーブ・ザ・チルドレンのロゴマークを印刷、私たちを応援するメッセージを発信して下さっています。「サッポロ一番」をお買いになった際には、ぜひ袋の裏面をご覧ください。

<ジャパン・プラットフォーム(JPF)>

JPFは、NGO、経済界、外務省の三者が対等なパートナーシップの下に協力・連携し、難民発生や自然災害時の緊急援助を、より効率的かつ迅速におこなうための組織です。SC世界連盟では、ここ数年多発する自然災害や紛争の緊急事態に対応するため、各国の協力体制を強化していますが、今回のミャンマー・サイクロン被害に対する支援は、JPFからの迅速な助成を受け実施されました。また、ヨルダン(イラク難民支援)、スリランカ、中国などでの支援に対しても助成を受け、緊急における教育や心のケアなどの分野で活動しています。

<国際協力機構(JICA)>

ODA政策の戦略化や実施体制の強化など、一連の改革の一貫として、2008年10月に新JICAが発足しました。NGO、民間企業、大学などとの更なる連携が進められており、SCJでも、多様で大きな枠組みでのJICAとの協力で、より多くの子どもたちを支援することができるようになります。2008年は、エジプトにおけるJICAのプロジェクト形成調査を受託しました。また、ネパール、ミャンマー、モンゴルでは、JICA草の根技術協力事業として、教育、栄養、子どもの保護の分野で活動を展開しています。

<外務省>

外務省は、日本NGO連携無償資金協力において、日本のNGOが開発途上国・地域で実施する経済・社会開発事業および緊急人道支援事業に助成しています。現在SCJでは、ネパール、ベトナムにおいて、子どもたちの教育や栄養改善の事業を展開しています。また、外務省が主催するNGO研究会(基礎教育分野)の実施事務局として、権利基盤型アプローチに基づいた基礎教育支援についてのワークショップを2回実施しました。

2008年度(2008年1月1日～12月31日)に格別なご寄付を頂いた企業・個人の方々(五十音順)

- アクセンチュア株式会社 ●イケア・ジャパン株式会社 ●株式会社アイデアインターナショナル ●株式会社ウエノテクノロジー ●株式会社クリード
- 住友商事株式会社 ●中央三井信託銀行 ●株式会社電通リサーチ ●NPO法人ネットワーク「地球村」 ●株式会社ファミリーマート
- 株式会社フジテレビジョン(あいのり募金) ●藤原紀香様 ●株式会社ロックダムアーティスト

※個人名の掲載については、ご本人の了承を得ています。

ごあいさつ

世界の子どもたちのために、日頃よりセーブ・ザ・チルドレンの活動を支えてくださり、まことに有難うございます。1年の積み重ねの報告を皆さまの元へお届けできたことを大変うれしく思います。

今回の報告では、皆さまからの貴重なご支援による私たちの活動が、現地の子どもたちや周りの大人の態度、そして社会にどんな変化をもたらすことができたか、そのことを一番にお伝えしたく、各国駐在員を中心にスタッフ総出で制作に取り組みました。

自然災害を受けた子どもの声、大人のはじめた争いに巻き込まれてしまった子どもの声・・・、こうして、世界各地でそれぞれの人生を今まさに歩んでいる子どもたちの声を知ると、その存在の尊さと、ともに生きている私たちの責任、仕事の重みを改めて感じます。

2009年は、セーブ・ザ・チルドレンがイギリスで誕生してから90年、そして「子どもの権利条約」が採択されてから20年の節目の年にあたります。団体を創設したエグランタイン・ジェブはこう言っています。「私たち大人がすべきことは、子どもの手のひらに自分自身を救うための手立てを置くこと」

偉大な創設者の言葉を胸に、セーブ・ザ・チルドレンが出会った子どもたちが自分の道を着実に歩いていけるよう、微力ではありますが、これからもできる限りの支援を続けていく所存です。どうぞ、これからもご支援ご協力をよろしくお願いいたします。

理 事 長 上野昌也

理 事・事 務 局 長 渋谷弘延

社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン役員一覧(2009年6月現在)

名誉理事長	立野 純三	(株)ユニオン 代表取締役社長
顧問	服部 悦子	
	長谷川 恵一	(学)エール学園 理事長
	上島 一泰	(株)ウエシマコーヒーフーズ 代表取締役社長
理事長	上野 昌也	上野製菓(株) 代表取締役社長
副理事長	深田 宏	元オーストラリア大使
	荒船 旦子	
専務理事	南 昭彦	コスモ警備保障(株) 代表取締役社長
理事	石川 陵一	聖路加国際病院 副院長
	井田 純一郎	サンヨー食品(株) 代表取締役社長
	今村 英明	ボストンコンサルティンググループ 代表取締役 中部・関西代表
	上田 準二	(株)ファミリーマート 代表取締役社長
	小浦 芳生	小浦石油株 代表取締役社長
	山田 敏紀	(有)山田会計事務所 代表取締役
	横山 英子	(株)横山芳夫建築設計監理事務所 代表取締役
	渡辺 剛彦	(株)アテナ 代表取締役社長
監事	渋谷 弘延	(社)セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 事務局長
	河合 弘之	さくら共同法律事務所 弁護士
	鈴木 教夫	太陽ASG有限責任監査法人 代表社員(公認会計士)